



Title	クスコ司教モリネドの聖堂建設・装飾事業 : 1673-1699年
Author(s)	岡田, 裕成
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2007, 41, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9674
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

クスコ司教モリネドの聖堂建設・装飾事業：

1673-1699年

岡田裕成

マヌエル・デ・モリネド・イ・アングーロ Manuel de Mollinedo y Angulo は、みずからの生地マドリードで司祭の職を務めた後、1673年に司教として南米アンデスの中心都市クスコに赴任した。以後1699年に没するまでその地位にあって、精力的な活動を続けた。

クスコはインカ帝国時代の首都であり、その司教区は南米アンデスの最も枢要な地域を管下に置く。司教座の創設は早く、征服の直後、フランシスコ・ピサロの軍勢に従ったドミニコ会士ビセンテ・バルベルデが最初のクスコ司教に任じられた1535年に遡る。17世紀に入って、ワマンガ、アレキパの各司教区が分離すると管区は縮小したが、なおクスコ周辺からティティカカ湖にいたる広大な地域を従える、アンデスでも最も重要な司教区であり続けた。

この重要な司教区の歴代の指導者なかで、モリネドはことに傑出した存在であった。彼は16世紀末に設立されたサン・アントニオ・アバ学院を大学として再興し、1) クスコにおける聖体祭を盛大に振興した。また彼は、司教区を構成する計137箇所の教区 doctorina の司祭に、人口その他、司教下にある共同体の現状についての報告を求め、これをとりまとめて国王に差し出す大部の報告書を作成した。2) だが彼の業績として、とりわけ重要なのは、広大なクスコ司教区全土における聖堂建設・装飾事業を精力的に進めたことであろう。

モリネドが司教として赴任する少し前の1650年、クスコは大地震に襲わ

れ、市内及びその周辺の聖堂には多くの被害が出た。その復興期にも当たるモリネドの在職期は、クスコの美術史の「黄金時代」ともいわれている。³⁾ しかしながら、司教区の広大な郡部を含めて、彼の指導のもと全体としてどのような建設・装飾事業が行われたのか、系統的な検討はこれまでほとんど行われてこなかった。本稿では、そうした研究への第一歩として、司教が国王カルロス2世に宛ててしたためた、3点の重要な書簡(史料1~3)をもとに、モリネドの建築装飾の後援者としての活動について基本的な事実関係を整理する。3点の文書はいずれもインディアス総合文書館(セビーリヤ)に保存され、要旨や抜き書きのかたちでの紹介はなされてきたが、全文にわたる書き起こしはこれまでおこなわれていない。⁴⁾ しかしながら、各聖堂についての直接的な情報のみならず、ことばの端々に、書き手たる司教自身の価値観やこだわりをもうかがわせるこれらの書簡は、文字史料の限られた南米植民地美術史の研究において、たぐいまれな重要性をもつ。ここでは、文面のそうした細部にも注目しつつ、以下、司教区の最も周縁の地に及んだモリネドの聖堂建築・装飾事業を総括し、それが征服以来のアンデス美術史のなかで、どのように位置づけられるのかを考えてみたい。

1. 1678年の報告書とモリネドの聖堂建設・装飾事業

モリネドがみずからの聖堂の建設・装飾事業について詳しく述べた国王宛書簡は、1678年、85年、98年の3回書かれている。そのうち最も網羅的なのは1678年の書簡である(史料1)。赴任5年目のこの書簡で司教は、司教区内の修道院、教区106、そして、アネホと呼ばれた教区付属の小村落26の計133カ所の聖堂について、新たになされた、あるいは進行中の建設・装飾の詳細を丹念に書き記している。当時クスコ司教区を構成したのはおおむね137教区であったから、⁵⁾ その数は、全体のかなりを占め

るものといってよい。ここではまず、書簡の記述をもとに、司教モリネドが着手しつつあった聖堂の建設・装飾事業が、どのようなものだったのかを概観しよう。

書簡を一覧して、まず注目されるのは、新しく建設された聖堂の数の多さである。合計 32 カ所において、聖堂の建設工事への言及（着手予定のものを含む）がなされている。その数は、書簡に言及された全 133 カ所のほぼ 4 分の 1 に達する。うち 2 つは、クスコ市内のもので、新来の跣足カルメル会修道院と、施療院付属の聖堂である（史料 1：2, 15）。残る 30 は郡部の聖堂で、キスピカンチ、カナス、ランバ、アサンガロ、パウカルタンボ、アバンカイ、アイマラエ、コタバンバ、チュンビビルカスの各地方に及ぶ（史料 1：23, 30, 35, 39, 40, 41, 44, 50, 54, 58, 60, 64, 71, 86, 87, 90, 91, 93, 94, 104, 105, 108, 109, 110, 113, 114, 115, 116, 118, 122）。これはひとつの建築ブームといってよいだろう。では、そのブームの中身はどのようなものだったのだろうか。

郡部における聖堂建設の事例のうち 14 件は、司教の記述によれば、全くの新築ではなく、前の聖堂の倒壊や大きな損傷を受けての再建であった（史料 1：23, 35, 39, 44, 64, 71, 95, 104, 105, 108, 110, 114, 115, 122）。その背後に、先にふれた 1650 年大地震があったことは間違いない。たとえば、クスコに近いキスピカンチ地方アコピアの聖堂についての項によると、新聖堂は、「この地方に被害を与えた地震により 27 年前に倒れた」旧聖堂を再建したもの、とされる（史料 1：23）。また、司教の書簡には、聖堂の「修理」についての言及も目立ち、その記述は計 18 の聖堂にみられる（史料 1：29, 33, 34, 42, 56, 65, 66, 67, 70, 80, 85, 106, 107, 119, 120, 121, 127, 128）。さらに、屋根の葺き替えや、ヴォールト天井の工事について述べた聖堂も、9 つある（史料 1：32, 48, 49, 52, 62, 63, 70, 82, 84）。聖堂建築ブームの背後に想定されるのは、地震をひとつの契機とする、アンデスの郡部

における聖堂の荒廃の進行と、それを復興させようとする司教の努力ということになろう。ただ、モリネドの事業をたんなる再建の枠でのみとらえるのは、彼の野心的な目標をやや過小に評価することになるかもしれない。この点については、改めて次節で検討することにしたい。

じっさい、この一連の聖堂復興事業は、司教モリネドが、個人としても並々ならぬ熱意を抱いていて取り組んだものであった。書簡の端々には司教のそうした姿勢がうかがわれるが、彼の肉声は、再建事業がうまく進まない場合に、特に強い表現となってあらわれる。アコマヨの聖堂の事例はそのひとつである（史料1：27）。司教によれば、この聖堂は建設に向けた「基礎工事をおこなってから随分になる」。みずから「繰り返しの請願」をおこない「再建に努力した」が、教区がドミニコ会のずさんな管理下にあるため叶わない、とモリネドは強い不満を表明する。さらに司教は、「30年近くにわたって、ミサは木の枝で葺いたところで」おこなわれてきたとし、その「破廉恥さ *indecencia*」に対する「わたしの心の大いなる痛み」を国王に訴えるのである。同様の不平は、チンチャイプキノの聖堂においては、国王代官に向かう。ここでは、倒壊した聖堂の再建が「資金と信者の不足」により進まず、司教は、国王代官による援助がなされないことを非難する（史料1：101）。時に困難と直面した聖堂の再建事業は、このような司教の熱意のもと進められていったのである。

ところで、先に挙げた30の聖堂建設工事のなかには、再建との記述のないものもあった。上に取り上げた14の再建事例を除いたすべてが、全くの新築であったかどうかは直ちに断定できないが、そのいくつかは、新規に建設されたものであることは大いにありうる。この点で注目されるのは、再建と特に注記されない16の聖堂のうち、7つまでが、教区の中の支村とでもいふべき「アネホ」の聖堂であったという点である（史料1：30, 40, 60, 93, 94, 109, 116）。教区を中心をなす町から独立してできたその

支村に、司教は、新たな聖堂を積極的に建設しようとしていたように思われるのである。じっさい、ニュニョアのアネホであるチュンガラChungaraの聖堂について、司教は次のように述べる。「新しい、品格ある聖堂がつけられた。村は新しいものなので、今後その装飾がおこなわれよう」（史料1：60）。

また、聖堂に関わる大規模な工事としては、合唱席の設置の例も数多く報告されている。クスコ大聖堂に加え（史料1：1）、郡部においては7聖堂について記述がある（史料1：32, 33, 34, 43, 53, 80, 111）。さらにこの工事にあわせて、オルガンの設置も多くの聖堂でなされた（史料1：32, 53, 123, 124, 126 [123, 124, 126はオルガンのみの設置]）。

聖堂の内部装飾については、祭壇衝立設置の記述が数多くみられる。その数は、クスコ市内においては大聖堂他4聖堂（史料1：1, 4, 11, 15）、郡部では26聖堂にのぼる（史料1：43, 52, 55, 57, 58, 59, 61, 62, 72, 73, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 76, 77, 78, 81, 85, 88, 91, 98, 112, 116）。なかには、ヤウリやアポロマのように、主祭壇衝立に加え、2基の脇祭壇衝立の設置を同時におこなった例もある（史料1：43, 73）。また、多くの最短衝立は「杉材 *cedro*」との言及があり、さらに「金箔貼り *dorado*」という記述もしばしば付随する。杉材金箔貼りの祭壇衝立は、おおむね16世紀以降バロック期に向け、本国スペインにおいて大いに発達し、聖堂装飾の要となってきたものである。

また、同じくしばしば「杉材金箔貼り」の「額縁 *marco*」に収められた絵画作品による装飾の例も、数多く報告される。「聖堂身廊部全体」を飾ったというクスコ市内サンタ・アナ聖堂の「大きな絵」のシリーズはその最も代表的な例である（史料1：13）。^{6）}額装画によるこうした身廊装飾は、市内ではさらにサン・プラス聖堂とベレン聖堂（史料1：11, 17）、郡部では、やはり「主祭壇から合唱席まで」の身廊部を「金箔貼りの額縁」に収まる「12点の大きなカンヴァス画」で覆ったプシなど4聖堂（史料1：22, 28,

47, 69) にみられる。

ただし、郡部の聖堂においては、こうした額装画とともに壁画による聖堂装飾も一般的であった。「金色の花をあしらったとても美しい春」をあらわしたフリーズ状の装飾をおこなったティンタの聖堂（史料1：28）や、「ダマスク織を模した」壁画を描いたヤナオカの聖堂（史料1：31）はその代表的なものである。壁画装飾についての記述は、このほか7聖堂の項に認められる（史料1：22, 26, 32, 37, 38, 45, 103）。また、ヤナオカの聖堂壁画が模していたというような、豪華な織物そのものによる装飾もなされた。「(グラナダの) タフタ織り」を壁面に飾るとの記述は、フリアカなどの3聖堂の項にみられる（史料1：42, 62, 73）。

このほか、十字架 *cruz* (*cruz alta*) や燭台 *candelerero*、灯り *lámpara*、祭壇前飾り *frontal* などの銀細工品は、司教の指導下、多くの聖堂に納められた。また、聖体顕置台 *custodia* や聖体箱 *sagrario*、聖体皿 *copón* などの典礼具も、「数多くのダイヤモンドとエメラルド、真珠、その他宝石をつけた金銀製の聖体顕置台」をつくらせたクスコ市内カルメル会修道院をはじめとする11の聖堂に関する記述の中で言及される。

2. 石造聖堂の建設と装飾の荘厳化

1678年の国王宛報告書簡は、モリネドのもとでクスコ司教区の多くの聖堂が新しく建て直され、またその装飾を一新していったことをよく示している。では、彼の聖堂建築・装飾の事業は、征服以来のアンデス植民地の歴史の中で、どのような意味をもっていたのだろうか。

まず、17世紀の終盤に、司教区の特に郡部を中心とした聖堂建築ブームが生じ、その装飾のさまざまな面での充実が図られた背景を考えてみよう。これに関し従来いわれてきたのは、1650年にクスコを襲った大地震との関係であった。⁷⁾すでにみたように、地震の影響は、司教の報告書

の中でもふれられている。だが、ここで今ひとつ注目したいのは、アンデス郡部の多くの聖堂が、副王フランシスコ・デ・トレドの先住民集住化政策のもと、16世紀末に一斉に建築されたアドベ（日干し煉瓦）造りの聖堂であったという点である。

1570年代に始まった副王トレドによる先住民集住化は、抵抗を続けたインカ帝国の残存勢力が平定されたのを受け、将来にわたる実質的な植民地統治の基盤として実施された制度であった。トレドは、レドゥクシオンとよばれた集住区に先住民を強制的に移住させることで、先住民社会の再編成を進めるとともに、キリスト教の効果的な宣教を実施しようとしたのだった。8) 司教モリネドが1678年の報告書の中で言及する、郡部の多くの「教区 doctorina」は、基本的にこのトレド時代のレドゥクシオンを引き継ぐものと考えてよい。その先住民の町にあったのは、16世紀末以降次々と建設された初期の聖堂であった。最初の建築ブームともなった、このトレド時代の聖堂は、ほとんどがアドベによる。たとえば、モリネドの書簡の中でふれられる聖堂のうち、アンダワイリーリヤスの聖堂は、おそらくはこの時期に遡る、クスコ司教区でも最も古い聖堂のひとつだが、ファサードの一部を除いてその構造部となるのは分厚いアドベの壁面である。9) 幸いこのかなり大規模な聖堂は、創建当初の状況を今日もほぼそのままにとどめている。しかしながら、構造材としては脆弱なアドベを用いた聖堂は、地震に対する備えのみならず、基本的な強度や雨期の湿気への耐久性において必ずしも十分な建造物ではなかった。書簡に再三言及される聖堂の倒壊・荒廃という事態は、地震をひとつの契機とするものあったにせよ、それ以前に、構造材そのものの強度不足という、初期アドベ聖堂の欠陥が露呈した結果だったのではないと思われるのである。そしてそのことは、司教モリネドが、その聖堂再建・建築ブームの中で、何を目指したかということにも深く関わる伏線となっているように思わ

れる。

ここで注目したいのは、司教モリネドが国王宛に送った1685年10月1日付の書簡である。司教は、書簡の冒頭部で次のように語る。

「陛下にはこれまでも折に触れ申し上げましたが、この司教区では聖堂が数を増し、また、神の恵みにより、その装飾や品格 *decencia* においても日々大いに進展がありました……。多くは建て直されるべきであり、そのほとんどは新しくつくられました。ランパの町の聖堂は、その建材において、また工事の贅沢さにおいて完璧なものです。聖堂は切石 *piedra labrada* で建てられ、じつによくできた建築です。同様に装飾においては、非常に高価な杉材の祭壇衝立や説教壇、金鍍金で美しく装飾された聖体顕置台、祭壇前飾り、燭台、その他、聖なる典礼を行うのに必要不可欠の銀の高価な品々によって飾られています……」(史料2)

ここで司教は、まず、みずからの聖堂再建事業の進展ぶりを報告した後、完成間もないランパの聖堂を、その代表例として誇らしく紹介する。その際彼が強調するのは、その聖堂が、「建材」と「工事の贅沢さ」において完璧であるという点である。そしてその具体的な基準となっているのは、「切石」で建てられているということであった。また、装飾においても司教はやはり素材にこだわり、「杉材」、「金鍍金」、あるいは「銀」といった具体的な言及を重ねる。

1678年の報告書簡の中で、ランパの聖堂は、再建新築に取りかかることが述べられていた。ただしそこには、「9千個のアドベと数多くの石材」が準備されていた旨が記される(史料1:44)。経緯は不明だが、ランパの聖堂の再建事業は、アドベ・石材混合の建築から、純粹に石材による建築へと変更されたようである。じっさい、この1685年完成のものともみら

れる現在のランパの聖堂は、今みた司教の書簡が述べるように、完全に石造の建築物である。10) この方針転換にも象徴されるような、石造建築へのこだわり、すなわちアドベ聖堂の更新建て替えこそ、17世紀末のクスコ司教モリネドの建設事業の大きな眼目だったのではなからうか。

副王トレド時代に本格化したアンデス郡部における聖堂建築の主流をなしたアドベ造りの聖堂は、上にみたとおり、強度において十分でないばかりか、石造聖堂を標準とする中世以来のヨーロッパ的価値観からするならば、美的にも粗末なものと思われていたに違いない。モリネドの事業は、たんに荒廃の進んだ司教区の聖堂を修復・再建するだけでなく、アドベづくりの建築を、聖堂としての「品格 decencia」を満たすと思われた、石造の建物に置き換えることを目的としていたのではないだろうか。1685年の書簡の続く部分でモリネドは、ランパに加え、さらにウルバンバ、ユカイ、アコマヨの聖堂再建にも言及している。そのウルバンバについて司教は、「(ランパと) 同じ建材」と述べて石造建築であることを強調し、逆に、ユカイの聖堂については、「それほどよい建材によるものではないが、先のふたつの聖堂と美しさにおいては比肩する」と述べて、アドベ造りであることを暗にほめかす(史料2)。ただしその言い回しは、同時に、アドベという素材に対する司教の否定的な見方を示唆している。

また、この1685年書簡にうかがわれる、「高価な杉材の祭壇衝立」という、素材の価値に注目した記述も、モリネドの関心のありかをよく示すものである。その背後にあったのは、植民地時代のアンデスで、木造の祭壇衝立よりもむしろ、それを擬似的に模した「壁画祭壇衝立 retablo pintado」が一般的だったという状況ではないかと思われる。壁画祭壇衝立は、郡部の多くの初期アドベ聖堂において、「高価」な木造祭壇衝立の簡易な代用物として広く用いられた。11) これに対し、モリネドの1675年の報告書によれば、前節に示したとおり、「杉材」(しばしば「金箔貼り」)の祭壇衝立

はクスコ市内の4聖堂、郡部26聖堂に設置されることになった。また、「杉材金箔貼りの額縁」のキャンバス画による大規模な身廊装飾も、4つの聖堂への設置が報告されていた。モリネドは、建材として一段劣ると思われたアドベの聖堂を石造のものに置きかえる一方、その内部装飾においても、「高価な杉材の祭壇衝立」を筆頭に、ヨーロッパ流のキリスト教聖堂が本来備えるべき格式を、アンデスの地に実現しようとしたのではないだろうか。彼が1685年の書簡で祭壇衝立に続けて列挙する、聖体顕置台他の銀細工品も、もちろん聖堂の装飾には必須の要素であった。それらは実際、1675年の報告書のなかでも、繰り返し言及されていた。

ただ、銀細工品のなかでも聖体顕置台 *custodia* は、モリネドにとって、いくぶん特別の意味をもっていたように思われる。聖体祭がことに盛大に祝われたマドリードからやって来た彼は、はじめに触れたように、この祝祭の振興に大いに尽力した人物であった。彼は、クスコ市内の各教区聖堂が、聖体への信仰を奉じた信徒団をもつことを推奨し、また、聖体祭の行列の巡回コースを延長した。¹²⁾ さらに、その死に際しては、クスコ大聖堂に、「サグラリオ（聖櫃）礼拝堂に、常に聖体が掲げられるよう」に、「金と宝石で飾られた銀製金鍍金の聖体顕置台」を寄贈する旨遺言している。¹³⁾ 聖体の秘蹟の正統性は、対抗宗教改革期以来カトリック教会で盛んに宣伝されたものだが、モリネドにとってそれは個人的にも特別に篤い信仰の対象だったのだろう。じっさい、1685年の書簡では、各聖堂の工事について述べた後、その完成に際しては、道のりが遠くともすべての聖堂に「聖体を奉じに向向く」つもりであると国王に述べている（史料2）。

モリネドの司教としての熱心な取り組みは、基本的には「インディオたちが抱くべき信仰を鼓舞する」（史料2）という大きな目的に沿ったものであった。征服以前の宗教の撲滅とキリスト教への改宗運動がもはや完了した17世紀の末年、初期のつましい聖堂を「品格 *decencia*」あるもの

に建て替え、その装飾を荘厳なものにすることこそ、「信仰の鼓舞」に必要な作業であったに違いない。前節でみたように、司教は聖堂再建の遅れたアコマヨで、ミサを「木の枝で葺いたところ」でおこなう「破廉恥 [indecencia]」を非難していた。この「decencia」と「indecencia」のことは対比の背後には、祈りの場にふさわしい荘厳を、形として整えることに大きな意義を見だしていた、司教の明確な意思をうかがうことができるだろう。そうした司教の意思のもと、聖堂の石造化や杉材金箔貼りの祭壇衝立の導入が図られ、また、やはり前節でみたように、アネホとよばれた教区の支村も積極的な聖堂建設の動きが及んだのだろう。副王トレド時代の聖堂建設が、おもに宣教のため当座の必要を満たそうとするものであったとすれば、モリネド時代は、聖体祭などの盛大な祝祭とともに、聖堂建築と装飾の事業をとおしてキリスト教文化の成熟段階を画するものだったといつてよい。

こうしたモリネド時代の状況は、1696年6月8日付の国王宛書簡にさらに明確に示される。司教就任後四半世紀近くを経過したこの晩年の書簡に、司教は、この時期完成期を迎えていた聖堂を列挙する（史料3）。それは、司教としての彼が長年深く関わった建設事業の一覧といつてもよい。

最初に挙げられるのは、1685年の書簡でもふれていたウルバンバの聖堂である。「美しく整えられた切石造りの聖堂。アーチやエンタブラチュアは美しく、ヴォールト天井を架ける」（fol. 838r）。さらに彼は、アヤビリ、シクアニ、アキラ、チュキバンバ、カバニーリヤ、マニヤソ、アシーリヨ、プティナ、ワンカワンカ、カイピ、そしてクスコ市内の先住民施療院聖堂とヌストラ・セニョーラ・デ・ベレン聖堂の建設工事について述べる（fol. 838v-839v）。このうち、シクアニとマニヤソはアドベ造りの聖堂、カイピが石造よりやや簡便な焼成煉瓦造りの聖堂である。だが、建築資材についての記述のない先住民施療院聖堂を除く8聖堂については、すべて、

「石造」を意味する「cal y canto」、あるいは「石と切石造り cal y canto y piedra labrada」との表現が、判で押したように繰り返される。特別に説明的な記述はないが、淡々と事実を重ねるようなその記述には、みずからのもとなされた大きな達成に対する司教モリネドの強い自信がうかがわれる。

結びにかえて

モリネドのもとの、クスコ司教区の多くの聖堂は、その様相を大きく変えていった。それはおそらく、震災をひとつの契機とした、復興のための建築ブームであったが、同時に、征服後のアンデスにおけるキリスト教美術移植の歴史の中で必然的に求められた、聖堂建築と装飾の更新を一気に進める成果をもたらした。華やかな祝祭文化とともに、建築や装飾に深い関心を抱いた司教が、この17世紀後半のクスコにやってきたのは、偶然とはいえ、大きな意味をもつことであった。「品格」ある建築と、荘厳な装飾を強く意識した司教のある種の美意識が、アドベ造りの質素な聖堂から、豪華な祭壇衝立を備えた石造の聖堂への転換を強く後押ししたのである。

モリネドが熱心に取り組んだ聖堂の石造化は、やがてアンデスの広い範囲で「メスティソ様式」とよばれる、特徴ある浮彫装飾の様式を生み出す前提ともなった。「先住民的なもの」との「混血 mestizaje」を想定してその名をあたえられたこの装飾様式の成立と、スペイン人司教モリネドとの関係は興味深い問題だが、その議論は別の機会に譲ることにしたい。ただ、その様式やモチーフの選択といった外面的な議論が主流であったその「メスティソ様式」論に対し、ここにみた史料は、パトロネイジという内側からの視点を提供するはずである。本稿において論じた、アンデス植民地美術の成熟と司教の関与の問題は、文書資料の乏しいこの分野においてあま

り注目されることなかったパトロンの役割について考えるきっかけともなろう。

注

- 1) Isabel Z. de Ruza. "El obispo don Manuel de Mollinedo y Angulo mecenas cuzqueño." *Revista del Instituto Americano de Arte* 9 (1959) : p.82.
- 2) この大部の報告書はピリヤヌエバ・ウルテアガによって全文書き起こされている。Horacio Villanueva Urteaga. *Cuzco 1689. Economía y sociedad en el sur andino*. Cuzco: Centro de Estudios Rurales Andinos "Bartolomé de Las Casas", 1982.
- 3) José de Mesa and Teresa Gisbert. *Historia de la Pintura Cuzqueña*. 2 vols. Lima: Fundación Augusto N. Wiese: I, p.14; Ruza 1959: p.81; Luis Eduardo Wuffarden et al. *Ex.Cat: La Procesión del Corpus en el Cuzco*: Unión Latina, 1996: pp.30-34.
- 4) これら3点の書簡を含むモリネドの国王宛書簡については、ピリヤヌエバ・ウルテアガが要約及び抜き書きを公にしている。Horacio Villanueva Urteaga. "Nuevos datos sobre la vida y obra del obispo Mollinedo." *Revista del Instituto Americano de Arte* 9 (1959) : pp.27-64.
- 5) Villanueva Urteaga 1982: p.4
- 6) これは、クスコ聖体祭の情景を描いたシリーズであるとされる。
Villanueva Urteaga 1959: p.30 (n.3)
- 7) Wuffarden et al. 1996: p.31.
- 8) 岡田裕成・齋藤晃 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』 名古屋大学出版会 2007年 70-72頁
- 9) アンダワイリーリヤスの聖堂については、岡田・齋藤 2007年:117-118頁、資料編 55-56頁
- 10) ランバの聖堂の建設経緯については、Ramón Gutiérrez. *Arquitectura del altiplano peruano*. Chaco: Departamento de Historia de la Arquitectura, Universidad Nacional del Nordeste, 1978: p.240. ここでグティエレスは、聖堂礎石のひとつに1685年の年記があることを指摘し、現在の聖堂が、司教の報告するものであることを確認している。
- 11) 壁画祭壇衝立については、岡田・齋藤 2007年: 121-122頁。クスコ周辺地域における植民地時代初期の木造祭壇衝立の現存作例は、ワロ、カイカイ、ワサクなどにあるが、全体としてその数はかなり限られている。Santiago

- Sebastián López, José de Mesa, and Teresa Gisbert. *Arte iberoamericano desde la colonización a la independencia*. 2 vols. Madrid Espasa-Calpe, 1992: I, pp.402-404.
- 12) Carolyn Dean. *Inka Bodies and the Body of Christ : Corpus Christi in Colonial Cuzco, Peru*. Durham: Duke University Press, 1999: p.82
- 13) Villanueva Urteaga 1986: pp.142, 151.

* 本稿は、科学研究費補助金基盤研究B（平成17-19年度）「植民地体制下南米の異文化接触領域におけるキリスト教美術受容過程の学際的研究」の成果の一部をなすものです。

（文学研究科准教授）

付録史料

史料1：司教モリネドよりスペイン国王カルロス2世への1678年1月4日付書簡「クスコ司教区においてなされた工事の概要 Resumpta y sumario de lo que se a obrado en el obispado del Cuzco」（Archivo General de Indias, Audiencia de Lima, leg. 306, fol. 401r-413v.）に記される、クスコ司教区管下の聖堂建設・装飾の詳細
（ここでは、一覧しやすいよう聖堂名ないし聖堂所在地に通し番号を施し、そのうえで各項全文の書き起こしをおこなった。）

- 1) クスコ大聖堂: Cathedral de Cuzco Hizosele retablo y sagrario de cedro de muy exelente escultura en el altar mayor, corredores al rededor del Presbyterio alto de cedro dorado, rodeanle por la parte de afuera pinturas con marcos dorados.

Acabose el choro y su silleria que es de cedro de primorosa escultura obra que no tiene igual este Reyno.

Para el sital de plata que se esta haciendo, para el ss.mo sacram.to e ayudado con mill ps.

En la Capilla del S.to Xpto se hizo una Lampara de Cinquenta marcos de plata, y unas andas de cedro doradas que a mis expensas costa mas de seiscientos ps.

En la Capilla de S. Joseph se erigió otro retablo de cedro dorado de toda perfeccion. Las demas capillas y altares estoy disponiendo su adorno, assi con el poco caudal que tienen como a expensas mias.

Conventos y Religiones（修道院と宗教施設）：

- 2) カルメル会修道院: Carmelitas Edificose un Monasterio de carmelitas descalzas de hermosa fabrica con su iglesia de cal y canto, y bovedas de ladrillo adornada un retablo primorosa de cedros dorado, y un pulpito de la misma escultura, y primorosa, una lampara de doscientos y setenta marcos de plata, y una custodia de plata y oro, que fuera de muchos diamantes esmeraldas, y perlas, y otras piedras preciosas de que esta guarnecida se tasa en doce mill ps. de plata; puse les enser iglesia la imagen de un Crucifijo de muy linda escultura, y para la ropa blanca de su sacristia,

- les e dado mas de trescientos ps. y e dotado una huerfana, para que professe en dho monasterio, que importa tres mill trescientos y doce ps. y medio su dote.
- 3) サンタ・カタリナ修道院: S.ta Cathalina El convento de Mojas de S.ta Cathalina, que necessitaba mucho de agua, se la conduce desde lejos, y fabrique dos fuentes, grandes en dos claustros que tiene. Costome la obra quinientos ps, y mas de trescientos y cinquenta dorar las rejas del choro alto y vajo en correspondencia de la iglesia.
 - 4) サント・ドミンゴ修道院: S.to Domingo Al conbento de S.to Domingo le di ochocientos ps. para dos coronas de plata y oro esmaltadas, que se hisieron para nra señora del Rossario, y el niño Jhs. ayude a la fabrica de su retablo con cien ps, y para el de s.ta rossa di otros cien ps, y cinquenta para otras andas de la misma s.ta.
 - 5) サン・フランシスコ修道院: San Fran.co Al conbento de s. Fran.co doy cada año cien ps., y cinquenta fanegas de trigo, aun en años que a valido diez ps de plata la fanega, fuera de limosnas particulares con que le assisto en las festividades de sus santos.
 - 6) サン・アグスティン修道院: S. Augustin Al Convento de S. Augustin hize un viril, para tener el *Lignum Crucis*, que guardaban en otro poco decente es de plata, y costo quatocientos pessos.
 - 7) メルセス会修道院: La mrced Al Conbento de nra señora de las Mreds di un sital de tela rica, para exponer el ss.mo Sacram.to los dias que se descubre.
 - 8) フランシスコ会レコレクシオン修道院: Recoleccion Al Conbento de la Recoleccion de S. Fran.co fuera de limosnas particulares doy cien ps. todos los años.
 - 9) サン・フェリペ・ネリ修道院: Congregacion A la Congregacion de S. Phelipe Neri que introduce en esta ciudad acudo con limosnas, y para el Hospital de Sacerdotes que le es anexo de doscientos ps. gastasse a mi costa el aceyite de sus lamparas, y son los de ella de sacerdotes de mucha utilidad, por sus exercissio, y confessions, predicacion y buen exemplo.
 - 10) サン・アントニオ・アバ学院: Seminario En el Colegio Seminario de clerigos estoy fabricando una capilla muy hermosa refectorio, y clases para los estudios, que costara mas de seis mill ps.

Parochias del Cuzco (クスコ市内の教区聖堂)

- 11) サン・ブラス聖堂: S. Blas En la Paroquia de S. Blas se a hecho un muy hermoso y gran retablo de nra señora del buen suceso es de cedro y se esta dorando, y en todo cuerpo de la iglesia se an puesto pinturas muy grandes con marcos de cedro de buena escultura que tambien se van dorando.
- 12) レコヒミエント・デ・サン・ブラス: Recogidos A se fabricado un recogimiento de mugeres en que muchas apartandose del mundo se van a vivir con todo buen exemplo y clausura aunque algunas ancianas salen a recoger limosna para su sustento, e acudido con cien ps. para la fabrica de esta cassa, y doy de limosna un pesso todas las semanas.
- 13) サンタ・アナ聖堂: Sta Ana En S.ta Ana se an hecho para todo el cuerpo de la iglesia pinturas grandes con marcos de cedro, que se van dorando.
- 14) サンティアゴ聖堂: S.tiago En Santiago se hizo una custodia de plata dorada muy rica, y algunos ornamentos.
- 15) 施療院: En la parroquia del Hospital se hizo un retablo de cedro, y trato de hacer iglesia de nuebo.

16) サン・セバスティアン聖堂: S. Sebastian En S. Sebastian, se acavo la portada de piedra que es obra singular, y de tanto primor que de cera que se labrase no se lograran mejor los del arte tiene de alto veynte y tres baras, y diez y siete de ancho, lebantose la capilla mayor y sera lebantando lo demas de la iglesia.

17) ベレン聖堂: Belen En la Paroquia de Nra Senora de Belen de an juntado de limosnas ocho mill ps. los quales se han gastado en hacer una custodia muy rica de plata sobredorada, y esmaltada adorna toda la iglesia de quadros de pintura, con sus marcos dorados de realce, y hacer Palio, y ornamento muy rico.

Provi.a de quispicancha (キスピカンチ地方)

18) オロペサ Oropesa: En la Iglesia de Oropessa se hizo un sagrario de cedro dorado muy bueno, en correspondencia del retablo y se adreço la iglesia

19) アンダワイリーリャス Andahuaylillas: En Andahuaylillas se hizo una custodia de plata dorada y esmaltada grande muy buena, y una capilla de Santa Rosa

20) ワロ Huaró (Guaro): En Guaro se adrezo la iglesia, y se hace Custodia, para la qual ayude con cien ps.

21) ウルコス Urcos: La iglesia de Urcos esta buena.

22) キキハナ Quiquijana: En Quiquixana se a pintado toda la iglesia y puesto tarjas grandes dorados, esta muy hermosa, y ahora se le esta haciendo un frontal de plata, y un juego de candeleros de plata con su cruz.

23) アコピア Acopia: En Acopia Anexo de Sangarara se ha hecho desde sus cimientos una iglesia muy buena, que avia veynte y siete años que se avia caido con el terremoto que padecio esta Provincia, y desde esse tiempo, no se avia podido reedificar por cuya caussa se decia missa en una enramada.

24, 25) マルカコンガ Marcaconga とそのアネホ、パンパマルカ Pampamarca: A la de Marcaconga se le pussieron algunos reparos para cuyo efecto di cinquenta ps. y la de el pueblo nuevo anexo de Pampamarca se cubrio de texa

26) プマカンチ Pomacanchi: La de Pomacancha, que es muy buena se esta empezando a pintar.

27) アコマヨ Acomayo (アルコスのアネホ): En Acomayo pueblo anexo de la Docta de Arcos a muchos años que sacaron los cimientos de la iglesia y por mas que con instancias mias, y autos muy apretados, e procurado su reedificacion, no ay forma ni esperanza de executarse por estar a cargo de frailes de S.to Domingo, que mudandose de Curas cada tres años, ninguno hace la cassa de Dios en este particular, antes se decia missa en una enramada cerca a de treynta años, con hato indecencia cossa que represento a V. Mag.d con gran dolor de mi corazon, por lo que toca a la solicitud Pastoral, viendo que los obreros, que mas me avia de ayudar della, proceden con tanta omisio en el Culto divino.

Provi.a de Canas (カナス地方)

28, 29) ティンタ Tinta とそのアネホ、コンバパタ Combapata: La iglesia de tinta que es buena sea pintado todo el techo, y las cenefas de una primavera muy hermosa con algunas flores de oro, y los marcos de las pinturas del cuerpo de ella, que se han hecho de nuevo se van dorando. la de combapata su anxo se esta reparando.

- 30) ピトウマルカ Pitumarca (チェカクペのアネホ) : En Pitumarca Anexo de Checacupi se esta haciendo iglesia nueva.
- 31) ヤナオカ Yanaoca: En Yanaoca se an gastado mas de veynte y st (siete?) mill ps. en aderezar la iglesia pintarla en forma de damasca y adornarla de ricas alahajas, esta muy hermosa, y su cura D, Joseph de Magauro, que a poco murio gasto de su costa diez y siete mill y quinientos ps. de los referidos.
- 32) チェカ Checa: En Checa se hizo el choro un organo, y un rejas dorado para el Presbyterio, y se pinto y doro toda Cpilla mayor, y oy se esta haciendo de bovida.
- 33,34) パンパマルカ Pampamarca とそのアネホ、スリマンカ Surimanca: En Pampamarca, y Sorimanca su anexo se estan reparando las iglesias, y haciendo los choros.
- 35) ラヨ Layo (ランギのアネホ) : En Layo anexo de Langui se esta haciendo la iglesia desde sus cimientos papa tener reparo la antigua, y se a hecho una cruz alta de plata.
- 36) ランギ Langui: En la de el dho pueblo de Langui, que es buena se hizo otra cruz alta de plata, quatro blandones de altar de altar de tres mecheros y media docena de jarras de plata.
- 37) カチャ Cacha: En Cancha se hizo un sagrario de cedro dorado en correspondencia del retablo que es bueno y se acavo de pintar toda la iglesia.
- 38) サン・ペドロ・デ・カチャ San Pedro de Cacha: En la de S. Pro de Cancha se a pintado todo el cuerpo y techo de la iglesia, y una y otra estan muy buenas, en que hizo el Cura un caliz dorado con sus vinajeras y salvilla de plata.
- 39) シクアニ Siquani: La de Siquani la estaba aderezando el Cura, y porque amenaza ruina por un lado, e mandado se reconozca por Alarifes, si tiene reparo, y sino que se haga otra nueva.
- 40) マランガニ Maranganí (シクアニのアネホ) : En la de Maragani su anexo se hizo otra nueva, y solo le falta el choro.
- 41) ピチグワ Pichigua: La de Pichigua se a hecho nueva, y un sitial de plata muy rico, y debe a s su Cura el D.or Ant.o Ramirez mas de siete mill ps. y sin embargo esta haciendo un hospital para los indios, y una capilla para los tratos de la iglesia.
- 42) コポラケ Coporaque: La de Coporaque se reparo toda y esta buena.
- 43) ヤウリ Yauri: En la de Yauri se a hcho una cruz alta de plata dorada y esmaltada muy rica, y se esta haciendo un retablo para el altar mayor, que corresponda a la iglesia que es muy hermosa, esta toda pintada dorada, y alfombrada, y del que oy tiene se an de hacer dos retablos, para los colaterales toda ella se a reparado y enlucido por de fuera, y se esta haciendo el choro.

Provincia de Lampa (ランパ地方)

- 44) ランパ Lampa: A la iglesia de este pueblo de Lampa se le an aumentado trecientos ps. de renta reduciendo el ganado vacuno, a ovejuno, y por que esta amenazando ruina se empieza a fabricar de nuevo, y ay hechos mas de noventa mill adobes y mucha piedra para este efecto, esta iglesia esta muy bien alhajada.
- 45) フリアカ Juliaca: En la de Juliaca se hizo una Cruz alta de plata, se llevo de pinturas con tarjas doradas todo el cuerpo de la iglesia, y en los blancos se pussieron tafetanes de Granada, con que esta muy decente.
- 46) カラコト Caracoto: En Caracoto se hizo una Lampara de cinquenta marcos de plata, un acetre con su hysopo, y unas vinajeras con su salvilla, que pessaron doce marcos y medio.

- 47) アトゥンコリヤ Hatuncolla: En Hatuncolla se estan haciendo pinturas y marcos de cedro, para todo el cuerpo de la iglesia.
- 48) マニヤホ Mañajo: La de Mañajo se a blanqueado, y se le pusso boveda.
- 49) ビルケ Vilque: En Vilque tambien se pusso boveda, y se blanqueo toda la iglesia, y se le compraron mill ovejas que rentar cien pessos cada año.
- 50) カワナ Cahuana: En Cauana se acavo la iglesia, y se hizo la capilla del baptisterio, y una lampara de cien marcos de plata.
- 51) カバニーリヤ Cabanilla: En Cavanilla dejo juntos ochenta marcos de plata para hacer una lampara.
- 52) プカラ Pucará: En Pucara se hizo un retablo en el altar de las animas, y se esta haciendo el thecho de boveda.
- 53) アヤビリ Ayaviri: En Ayaviri se hizo el choro y un organo que costo mill, y quinientos ps., y se esta haciendo un retablo para el altar de nra Señora, en acabandole se an de hacer otros dos de cedro, el uno para el altar mayor, y el otro para un colateral.
- 54) ウマチリ Umachiri: en Umachiri se va acavando la iglesia que la halla empezada, y queda muy buena con sus capillas, torre, y galpon para los trastos.
- 55) リヤリ Llalli (ウマチリのアネホ): En Llalli su anexo, se a puesto un retablo en el altar mayor de cedro muy bueno, y para los dos iglesias se compro una custodia de plata dorada y esmaltada que costo mill ps., y se hizo copon para las famas.
- 56) マカリ Macari: En Macari esta la iglesia buena reparada y se hizo una Custodia de plata dorada, y esmaltada, y un acetre de doce marcos de plata, y ahora e mandado se haga un frontal de plata, y un juego de candeleros de plata con su Cruz.
- 57) クピ Cupi: En la de Cupi su anexo se esta haciendo un retablo de cedro muy bueno.
- 58) オルリーリヨ Orurillo: En Orurillo se acavo la iglesia con toda perfeccion, y se le esta haciendo un retablo nuevo.
- 59) ニュニョア Ñuñoa: En Nuñoa se compro un retablo de cedro que costo dos mill ps., se agerezo pinto y doró el arco toral, y se hicieron gradas de piedra para el Presbyterio, y una capilla para los tratos de la iglesia, y se compraron dos mill ovejas con que tiene doscientos pessos mas de renta, y se le an de comprar hasta seis mill, por estar deviendo la hacienda de D. Julio Texeyra defunto cura que fue de esta doct.a quatro mill ps. de resto del alcanze que le hize en la vissita.
- 60) チュンガラ Chungara (ニュニョアのアネホ): en Chugara su anxo se a hecho iglesia nueva decente, y se va adornado ahora por ser nuevo el pueblo.

Provincia de Azangaro (アサンガロ地方)

- 61) アサンガロ Azángaro: En la Iglesia de Azangaro se a hecho un pulpito de cedro con su coronacion, muy primoroso y costoso, y un retablo de cedro pequeño en el altar de nra. Señora.
- 62) アラパ Arapa: En Arapa se a hecho un retablo de cedro muy bueno y se blanqueo y hizo de boveda toda la iglesia, y para la Capilla mayor se compro una colgadura de tafetanes, cubriose de texa toda la iglesia que lo estaba antes de paja. Don Julio de la Barda su cura pusso en dhas obras, mill quatrocientos y cinquenta ps. de su costa.
- 63) アラパのアネホ (名称言及なし): La iglesia de la villa su anexo se blanqueo, y se reformo el thecho.

- 64) サマン Samán: La de Saman se hizo desde sus cim.tos porque se habia hundido.
 65, 66) カミナカ Caminaca とニカシオ Nicasio (アネホ) : La de Caminaca y su anexo Nicasio se an reparado y en ellas sean hecho algunas alhajas necesarias.
 67) チュパ Chupa: La de Chupa tambien se reparo.
 68) タラコ Taraco: En la de Taraco se an de hacer diez y ocho candeleros de altar, y dos cruces, con mill seiscientos y diez y siete ps. que se an ahorrado desde que la vissite, con la disposicion por ordenes que la dexe.
 69) プシ Pussi: La de Pussi se a reparado y se le an hecho doce lienzos grandes, que la cogen toda, desde el altar mayor hasta el choro, a los cuales les an de poner marcos dorados.
 70) サンティアゴ・デ・ププハ Santiago de Pupuja: La de Santiago de Pupja tambien sea reparado y ahora se esta haciendo de boveda.
 71) アシーリヨ Assillo: En Assillo por que amenaza ruina por un lado la iglesia sin poderse reparar, esta dipuesto el hacer otra nueva, y se van previniendo todos los materiales.

Provi.a de Caravaya (カラバヤ地方)

- 72) サンディア Sandia: En Sandia se acavo la Iglesia y el retablo un correg.or le dio de limosna una lampara de mas de cien marco de plata, y se le an puesto quatrocientos ps. de renta, en quatro mill ovejas.
 73) アポロマ Aporoma: En Aporoma se hizo el retablo principal, y los de los dos colaterales, cubriose de oja de lata toda la iglesia por ser tierra muy humeda, enmaderose de nuevo, y se compro una colgadura de tafetanes de Granada, que la (ilegible: colgara?) desde el altar mayor hasta el choro.
 74) パロ Paro: En Paro se esta haciendo el retablo del altar mayor, comprandosele dos mill y quatrocientos ovejas a la iglesia que le rentan doscientos y quarenta ps.
 75) コアサ Coasa: En Coaza se esta haciendo un retablo de cedro y el Cura dio un copon dorado muy rico, y un acetre de diez marcos de plata, dos majadas de ganado vacuno y ovejuno, que se las tenian usurpados se le volvieron.
 76) イトゥアタ Ituata (コアサのアネホ) : En Ituata su anexo se hizo un retablo de cedro dorado en el altar mayor de buena escultura.
 77) アヤパタ Ayapata: En Ayapata tambien se hizo un retablo de cedro dorado y se aderezo toda la iglesia.
 78) オリャチェア Ollachea (アヤパタのアネホ) : En la de Ollachea su anexo tambien se esta haciendo otro retablo de cedro.
 79) サン・フアン・デル・オロ San Juan del Oro: En la de S. Ju. del Oro y sus anexos no se a podido obrar por ser muy pobre, y no tener gente.

Provi.a de Calca (カルカ地方)

- 80) カルカ Calca: En la Iglesia de Calca se an hecho algunos reparos esta haciendo el choro.
 81) コヤ Coya: En la de Coya se a hecho un retablo nuevo.
 82) ピサク Pisac: La de Pissac se esta haciendo de boveda, y se le a hecho una lamparra de cien marcos de plata.

- 83) タライ Taray (ピサクのアネホ) : A la de Taray su anexo se le a hecho, otra lampara de quarenta marcos de plata.
- 84) サン・サルバドル San Salvador (ピサクのアネホ) : La de S. Salvador tambien anexo se esta embovedando y blanqueando.
- 85) タンボ Tambo: En la de Tambo se a hecho un retablo nuevo de cedro dorado de muy buena escultura, y toda ella se a reparado.

Provi.a de Paucartambo (パウカルタンボ地方)

- 86) パウカルタンボ Paucartambo: La iglesia de Paucartambo se va edificando, y quedara buena. La cassa del cura que lo impedia la hize derribar q.do vissite la dha iglesia en las demas de aquella provi.a no se ha podido hacer obra de entidad.

Marquessado de Oropessa (オロベサ侯爵領)

- 87) ウルバンバ Urubamba: La iglesia de Urubamba se a fabricado desde cimientos, por el dentro es toda de piedra de silleria muy hermosa, y tiene ya de alto de diez varas sera la mejor que tenga el Reyno, di para que se empezasse quatrocientos ps. de mi cassa.
- 88) ユカイ Yucay: En Yucay, se estan haciendo dos retablos de cedro muy buenos fuera de otro que hize antes.
- 89) マラス Maras: En Maras no a avido fama de hacer nada tengo mandado alargar la iglesia.

Provi.a de Abancay (アバンカイ地方)

- 90) アバンカイ Abancay: En este pueblo de Abancay se esta haciendo una iglesia toda de cal y canto, y la Capilla mayor esta ya acavada, a su cura el D.or Simon Guerrero, que fue de la Compañia le tengo fuera del oho curato desde que llegue a esta ciudad, por mal cura y por razones que para ello e tenido.
- 91) ワニパカ Guanipaca: En Guanipaca se hizo una iglesia muy buena desde sus cimientos, y un retablo muy bueno de cedro.
- 92, 93) リマタンボ Limatambo, パンパコンガ Pampaconga (アネホ) : En Limatambo se enmadero la iglesia y la de Pampaconga su anexo, se hizo nueba con retablo de cedro dorado.
- 94) モリエパタ Mollepata (リマタンボのアネホ) : En Mollepata tambien anexo se hizo otro retablo del mismo genero, y porque la iglesia es bieja se an avierto cimiento para otra. Tambien se hizo en este curato una custodia de plata sobredorada, que costo mas de quatrocientos ps.
- 95, 96) クラワシ Curaguasi, カチョラ Cachora (アネホ) : En Curaguasi, y Cachora su anexo se hundieron las iglesias, y por el descuydo en repararlas su cura Manuel Alvarez de Bustos, a mas de dos anos, que le tengo fuera del curato. La iglesia de este pueblo de Curaguasi se esta fabricando, la del de Cachora no se puede hasta que esta se acabe.
- 97) スリテ Zurite: La de Zurite sea aderezado.
- 98) ワロコンド Huarcocondo: En la de Huarcocondo se hizo un retablo de cedro dorado.
- 99, 100) アンタ Anta, プキウラ Puquiura (アネホ) : La de Anta, y la de Puquiura su anexo sean aderezado y estan buenas.
- 101) チンチャイブキノ Chinchaypuquio: La de Chinchaypuquio, se esta cayendo, y aunque e hecho muchas diligencias no se a podido reedificar assi por falta de media, y feligreses, como por

no aver querido ayudar en cossa D. Al.o de Espinoza correg.or de esta Provincia.

Provi.a de aymarae (アイマラエ地方)

- 102, 103) ランプラマ Lambrama, カイピ Caypi: La iglesia de Lambramas se enmadero de nuevo, y la de Caypi anexo se aderezo, y pinto toda ella, hizose una lampara de cien marcos de plata, y dos coronas deradas y esmaltada para Nra Seõra, y para el Niño.
- 104, 105) シルカ Circa, ウラワイチヨ Uruguaycho (アネホ) : En Circa se esta haciendo la iglesia que se avia caydo, y en Uruguaycho su anexo se esta haciendo otra mediana por averse hundido la antigua
- 106, 107) チャオチ Chaochi, チャルワニ Chaluani (アネホ) : La de Chaochi y Chaluani tambien anexo se a de reparar.
- 108) アンコバンバ Hancobamba: La de Hancobamba que esta hundiendose se le mando quitar la madera, para aprovecharla en otra que se mando edificar.
- 109) パンパリヤクタ Pampallacta (アンコバンバのアネホ) : En Pampallacta su anexo se hizo una iglesia pequeña correspondiente al pueblo.
- 110) コルカバンバ Colcabamba: La de Colcabamba se hundio, y se hizo una Cpilla decente, por no aver avido posible, y gente, para poderla hacer grande como la antigua.
- 111) アンタババンバ Antabamba: En la de Antabamba se hizo el Choro, y unas rejas de cedro al Presbyterio y a los colaterales.

Provi.a de Cotabamba (コタババンバ地方)

- 112) タンボバンバ Tambobamba: En tambobamba se hizo un retablo nuevo de cedro.
- 113) マラ Mara: En Mara se hizo la iglesia desde sus cim.tos.
- 114) サン・ペドロ・デ・アキラ San Pedro de Haquira: En S. Po de Haquira se hizo una Custodia dorada y esmaltada, muy buena, y se ha empezado a hacer iglesia nueva por estarse cayendo la antigua.
- 115) コチャ Cocha (アキラのアネホ) : En Cocha su anexo se a hacho iglesia nueva por amenazar ruina la vieja.
- 116) トウルペイ Turpay: En Turpay se hizo tambien iglesia nueva y un retablo, y pulpito de cedro de primosora escultura.
- 117) ママラ Mamara (トウルペイのアネホ) : En la de Mamara su anexo se hizo un pulpito de cedro.
- 118) クラスコ Curasco: En Curasco se esta haciendo iglesia nueva.
- 119, 120, 121, 122) ワイリヤテ Guayllate, リチェヴィルカ LLicchevilca (以下アネホ), パルパカチ Palpacachi, コルパワシ Corpaguasi: Las iglesias de Guayllate, y sus anexos LLicchevilca y Palpacachi, se an reparado, hacerse de nuevo la de Corpaguasi por estar cayda la antigua.

Prova de Shumbivilcas (チュンビビルカス地方)

- 123) チャマカ Chamaca: En chamaca se hizo un organo que costo seiscientos ps.
- 124) コルケマルカ Colquemarca: En Colquemarca se hizo otro, y un Cura Antonio Juarez le pusse sacerdote interinario.

- 125) カパクマルカ Capacmarca: En Capacmarca se aderezo la iglesia y a su Cura Ju. Gutierrez Sencio le pusse tambien itinerario, uno y otro son muy viejos, y no estan apto para el minist.o de Curas.
- 126) ベリリエ Velille: En Belille se aderezo la iglesia, y se hizo un organo, que costo ochocientos ps.
- 127, 128) リュソ Lluso, キニョタ Quiñota: La de Lluso y quiñota se repararon.
- 129) リビタカ Livitaca: La de Livitaca esta perdida y sin esperanza de remedio padeçe la misma plaga de estar cargo de Religiosos mercenarios como los otros que tengo significado a V. Mag.d esta provin.a es pobre por cuya razon se an hecho pocas obras en sus iglesias en ella, y en los altos de la de Canas consagre muchas campanas, que con eso an tenido gran consuelo los feligreses por hallarse libres, a donde se oyen de los continuos rayos y tempestades, que los afligian.

Prov.a de Chilques y Mascos (チルクエス、マスケス地方)

- 130) カピ Capi: En Capi se a aderezado la iglesia y puesto retablo de cedro dorado.
- 131, 131, 132) ワノキテ Guanoquite, ヤウリスケ Yaurisque (以下アネホ), オマチャ Omacha: En Guanoquite Yaurisque y Omacha, se ha hecho poco, por ser pueblo pobres. Los curatos de entidad de esta prov.a las tienen Religiosos mercenarios, y todos estan muy disipados.

史料2 : 司教モリネドよりスペイン国王カルロス2世への1685年10月1日付報告書簡
(Archivo General de Indias, Audiencia de Lima, leg. 306, fol. 592r-592v.)

Señor,

Tengo dado quenta a V. Mag.d en diferentes ocasiones de los aumentos con que se hallan las Iglesias de este obispado, que a Dios gracias cada dia reconozco mayores progressos en el adorno y decencia, en que segun noticias que e adquirido, se aventaban en lo general a todas las de este Reyno; las mas sean reedificado, y entre las muchas que se an hecho de nuevo, la del pueblo de Lampa queda en toda perfeccion, assi en lo material por lo suntuoso de su obra, que es de piedra labrada y de primorosa arquitectura, como en las alhajas de que esta adornada de ornamentos, retablo y pulpito de cedro muy costosos, custodia dorada y esmaltada muy preciosa, frontal, candeleros, y demas preases de plata sin que se eche manos alguna que sea necesaria para el servicio del culto divino.

La de la Villa de Vrubamba en que estoy entendiendo esta muy buen estado, y es en lo material de la misma forma, faltale poco para quedar concluida.

La de la Villa de Yucay aunque no es de tan buenos materiales, iguala a las dos antecedentes en la hermosura, y esta adornada con mucha decencia.

La de Acomayo logra casi la vltima perfeccion, es muy fuerte y hermosa, con bastantes ornamentos: a todas (fol. 592v.) procurare yr a colocar el sanctissimo sacramento, aunque estan tan distantes unas de otra y la de Lampa mas de sesenta leguas de esta ciudad, para fervorizar, en quanto pudiere mi assistencia, a los indios en la devocion que deven tener y agradecerles personalmente lo que an ayudado a estas obras, de que repito noticia a V. Mag.d por la complacerla que tendra en ella el catholicissimo y Realzio de V. Mag.d Dios q. de a V. Mag.d como a menester la Xritiandad.

Cuzco y oct.e 1 de 1685,

(firma)

史料3：司教モリネドよりスペイン国王カルロス2世への1696年6月8日付報告書簡
(Archivo General de Indias, Audiencia de Lima, leg. 306, fol. 838r-841v.)

En despacho de 27 de Septiembre del año pasado de 1691 se da V. Mag.d por servido de la vigilancia con que atendido a los adelantamientos de las Iglesias de este obpdo, de que hize ralacion a V. Mag.d en carta de 18 de Diciembre del año pasado de 1687 en que remita a V. Mag.d los resumenes de las visitas que hize de los curatos de las provincias de Quispichachi, Paucartambo, Calca y Lares, y Marquesado de Oropesa, y de las que avian executado los Visitadores que embie a lo restante del obpado: y considerando la gran complacencia que el catholico zelo de V. Mag.d interesa en los progressos del culto divino, y adornos, doy nuevam.te cuenta a V. Mag.d de averse acabado en toda perfeccion, y quedar colocadas la de la Villa de Vrubamba en el Marquesado de Oropesa, de cal y canto y piedra de silleria hermosam.te labrada, arcos, y cornisas muy presiosas, cubierta de bobeda, es su Cura el D.or Don Martin de Rado Angulo y Velasco; oy estoy para pasar a aquella Villa a poner en execucion vn retablo de cedro de obra correspondiente a la de la Iglesia, y otras alhajas que necessita.

(fol.838v.)

La Iglesia de Ayaviri en la provincia de Lampa, tambien de cal y canto, y piedra de silleria, arcos, y cornisas de labor de mucho realce, y portada de tres cuerpos de columnas labradas, nichos, pilastras de cornisas de gran primor, a la fabricado desde sus cimientos D. Juan de la Borda Irigoyen cura de aquella doctrina, y comissario del S.to oficio.

La Iglesia de Sicoani en la provincia de Canas, esta es de adobes muy fuerte, capaz, y hermosa, y la a hecho desde sus cimientos su Cura Don Gaspar Carros y Zegarra.

De las que actualmente se estan haziendo, las que se hallan mas adelantadas son: la de Haquira en la provincia de Cotabambas, de cal y canto, y piedra labrada de hermosa arquitectura y labores, con portada de igual correspondencia, y le falta muy poco para acabarse en perfeccion, es su Cura el D.or Don Antonio Henriquez Camargo, que la hecho desde sus principios.

En la misma provincia esta la doctrina de chuquibamba encomendada a los Religiosos de San Agustin, y es oy Cura en ella Fray Juan Rubio de Pina, que esta haziendo Iglesia nueva de cal y canto, y la tiene en buen estado.

La de Cabanilla en la provincia de Lampa se esta fabricando de cal y canto, y piedra labrada, a diligencia de Joseph de la Fuente Cura desta doctrina.

La de Mañazo en la misma provincia, va de (839r) obra de adobe, y corre por el cuydado del D.or Don Joseph de Pantigozo y Vera, su Cura, quien assi mismo a hecho en el pueblo de Vilque de dha doctrina otra Iglesia de cal y canto y piedra labrada, de muy excelente arquitectura, de que antecedentem.te di cuenta a V. Mag.d.

La de Asillo en la provincia de Azangaro es tambien de cal y canto y piedra labrada, y la esta haziendo el D.or Juan Nuñez de Guevarra Cura de aquella doctrina.

En el pueblo de Putina de la misma prov.a logra muy buen estado la Iglesia que se esta

fabricando de cal y canto y piedra labrada, y aviendo muerto el Cura que la hazia, va a sucederle Don Andres de Mendoza y Cisneros, a quien elegi, entre los sujetos que se opusieron a esta doctrina, por ser obrero, y esperar la prosegura con actividad, y cuydado.

La de Guancaguanca en la prov.a de Chilques va tambien de obra de cal y canto, y se halla en estado de cubrirla, es muy hermosa, y fuerte, hazela Don Fran.co Romero de Isasaga Cura de aquella doctrina.

Tambien se halla muy adelantada la de Nra. s.ra de Caypi, en la prov.a de Aymaræs, esta es de cal y ladrillo, de muy hermosa fabrica, y la esta haciendo el Pdr Juan de Alarcon y Tapia su cura.

En esta ciudad sera prosiguiendo la Iglesia de la Parrochia del Hospital de los Naturales, que (fol.839v.) desde que se començo; se a continuado sin intermission; de su fabrica, matriales, proporsion y costos di quenta a V. Mag.d en carta de 10 de Março del año pasado de 1695 cuyo duplicado va en esta ocasion, y desde entonces la a adelantado de suerte de aplicacion de su Cura de Lic.do Don Andres de Mollinedo, que espero en Dios a de perfeccionarse en breve tiempo, sin embargo de lo prolixo, y costoso desta obra, que como referi a V. Mag.d en la carta citada, no avra otra fuera de la cathedral mas hermosa, ni de mejor architectura.

Tambien se esta fabricando de cal y canto, y piedra labrada de silleria la Iglesia de la Parrochia de Nra S.ra de Belen desta ciudad, que quedara muy hermosa y capaz, es su cura Don Martin de Irure que atiende con igual vigilancia a la continuacion de esta obra, y en medio de lo que esta trabajando en ella, a logrado su zelo entre otras alhajas, tres que me parecen dignas de la noticia de V. Mag.d y son, una corona de esta milagrosa imagen, hecha a proporcion del bulto que es muy grande, de obra de filigrana guamecida toda de sobrepuestos de oro, esmaltado y relevado, y joyas de diferentes hechuras, hechas al proposito, y medida de los huecos y labores, de diamantes, esmeraldas, rubies, topacios, zaphiros, amatistas y otras piedras preciosas haciendo juego de cada genero destes, orlada, y matizada de mucha cantidad de perlas de diferentes tamaños, esta tasada en veinte y dos mil pesos. =Vna custodia de plata dorada, guamecida en la misma forma que la corona de sobrepuestos de oro realçado y esmaltado (fol.840.r.) con juegos iguales de amatistas y perlas netas, que pasa ochenta marcos, y esta tasada en siete mil pesos. =Un pulpito de cedro labrado de columnas salomonicas, y varias labores, obra tan primorosa y prolixa en talla y escultura, que trabajando continuam.te en ella doze, o catorce oficiales, duro por espacio de tres años, de que se que de conjeturar el mucho costo que tuvo, y assi en ella, como en las otras se a logrado mi desseo y cuydado, aviendose conseguido en tan cabal perfeccion, y no teniendo este Cura medios para poder lo costear por si solo, le he ayudado con mis limosnas para la Iglesia, y estas obras, aviendo dedicado para la corona y viril mas pectorales y anillos, considerandolos mas bien empleados en ellas,

Despues que di quenta a V. Mag.d del estado que lograva la Iglesia de la parrochia de San Sebastian, me parecio conveniente para su mayor permanencia hazerla de tres naves, y aviendolo executado assi, a quedado mucho mas desahogada, y hermosa, y con toda la fortaleza que necessitava assegurada por una, y otra parte con las dos naves que le e añadido, tambien fue nessesario ensanchar el retablo, y quedado perfecto, y aviendose dorado todo se halla la Iglesia cabalmente adornado con la correspondencia de las pinturas y marcos dorados, y oy se estan disponiendo lienzos y marcos de la misma forma para el adorno de las dos naves nuevas, (for.840.v.) es Cura desta Parrochia el D.or Pedro de Vega.

En la Iglesia de la Parrochia de San Blas se an hecho tres retablos de cedro muy bien tallados,

y con hermosas esculturas, an se dorado los dos, y para el grande que es el de el altar mayor se queda disponiendo el dorado a correspondencia del sagrario que es el mas hermoso de toda la ciudad, un pulpito tambien de cedro, con muchos bultos de escultura de la misma proporcion, y primor, que el referido de la Parochia de Nra S.ra de Belen, un frontal de plata muy realçado que pesa ciento y treinta y cinco marcos, dos lamparas, dos atriles, palabras de la consagracion, Evangelio de San Juan, blandones, jarras, ciriales, cruzalta, incensarios, y acetre todo de plata, tres sillas de terciopelo carmesi con cantoneras de plata de relieve en la sacristia que tambien se hizo de nuevo se an puesto caxones, escaparates, y alacenas todo de cedro tallado y ornamentos enteros de telas ricas, terciopelos, y damascos, las quales alajas importaran cerca de sesenta mil pesos, y se han hecho ten tiempo del D.or Don Gaspar de la Cuba Maldonado su Cura.

Y aunque las demas iglesias de las Parrochias de la ciudad, y doctrinas del obpado se hallan con muchaos aumentos de frontales de plata, atriles, custodias, calizes, copones, juegos de candeleros, lamparas, y otras alajas, y ornamentos desde la vltima ocasion en que di noticia individual a V. Mag.d no la repito aora de cada Iglesia en particular por no dilatar esta relacion, deviendo de atribuir a especial providencia de Dios, que quando las (fol. 841r.) rentas de las Iglesias no alcançan a la decima parte de los gastos, emprendan los curas obras tan costosas.

La Iglesia Cathedral, Señor, en que mas immediatam.te se esmera mi obligacion, tiene todo lo necesario para el cabal adorno de su culto, pues despues del tabernaculo de plata que hize, que es del tamaño del retablo del altar mayor, se an colocado quatro hacheros de plata, que los dos mayores me costaron nueve mil y ochocientos pesos, y aunque la Iglesia tenia custodia muy buena, e hecho otra para que sirva en las procesiones de Corpus, de plata dorada con sobrepuestos de oro esmaltados, guarnecida de esmeraldas y amatistas, an se hecho calizes, atriles, y Missales aferrados en plata, e le dado ornamentos de todos colores de muy preciosas telas, y otras cosas necesarias al servicio de las dos sacristias, demas del retablo mayor e colocado otros quatro en los angulos en que faltavan, llenando lo retante de la Iglesia de pinturas grandes con marcos de cedro dorados, y coronacion, y remates de lo mismo, con que se halla en el todo con hermosa perfeccion.

Tambien espero la a de lograr cabal la Iglesia de Iluzco en la provincia de Chumbivilcas, que se halla ya en estado de acabarse, es de cal y canto y piedra de silleria, y la començo desde sus cimientos D. Juan Martinez de Carbajal cura de esta doctrina, y assi esta Iglesia, como la de el pueblo principal de ella, que es quiñota (fol.841v.) se hallan muy ricas de ornamentos y alajas de plata labrada, pudiendo certificar a V. Mag.d que aun las mas remotas de los Andes an conseguido en este tiempo toda la decencia y adorno que necessitan Dios q.de a V. Mag.d como la Christianidad a menester. Cuzco y Junio 8 de 1696

Señor

(firma)

SUMMARY

Reforma artística en el Cuzco bajo el obispo Mollinedo: 1673-1699

Hiroshige OKADA

El obispo del Cuzco Manuel de Mollinedo y Angulo tuvo un papel destacado en el desarrollo artístico en la región a fines del siglo XVII. Bajo su iniciativa, se realizó una serie de restauración y renovación de las iglesias no sólo en la capital sino también en las zonas más remotas de la región, sobre la cual dan testimonio algunas cartas suyas dirigidas al rey de España. Ofrecemos aquí la transcripción de tres cartas más interesantes para considerar los motivos y objetivos del obispo en su proyecto artístico tan dirigentemente realizado.

La primera carta es un informe fechado en 1678, que lista 133 iglesias de su obispado donde se hizo alguna obra. El obispo Mollinedo muestra en algunas líneas de este informe su pasión personal para la reforma artística de la miserable situación de las iglesias en su obispado, además de la minuciosa descripción sobre las obras en cada iglesia.

Una cuidadosa lectura de la segunda y la tercera carta, fechada en 1685 y 1696 respectivamente, sugiere que uno de los objetivos de la reforma artística por el obispo consistió en la promoción de la construcción de las iglesias de piedra en lugar de las iglesias de adobe que eran dominantes por entonces en las zonas rurales. Tal proyecto de Mollinedo formó una parte de la base para la formación de así llamado "estilo mestizo" que aparecería entre las iglesias de piedra construidas en los Andes del siglo XVIII.

キーワード : Manuel de Mollinedo y Angulo, Los Andes, Arte religioso, Arquitectura colonial